



J O E L

T U D O R

ジョエル・チューダー その生き方の今

言わずと知れたロングボードのカリスマは、サーフィンが持つ多様性の維持に大きな役割を果たしてきた。先人に学び、生活を整え、経験から学ぶ。失われようとしている古くさいが尊い生き方を、ジョエルは実践し、守ろうとしている。

Text/ Eisuke Tomiyama
Photo/ Kenyu Takahashi





サーフィン界に柔術を持ち込んだ先駆者であり、柔術の指導者でもある



穏やかさと激しさ。狼のような目が彼の内にある両面を映し出す

サーフィン界の先人たちと行動をともにし その歴史と真髄を引き継いできた。

シエイパー)の工場に住み込みで働いていた。以前はマイク・ディッフェンダーファーが住んでいた家をチャノンが受け継いで、そこに住んでいたんだ。

最近のデル・マーは目を覆う状況だ。60年代、70年代の建物が壊され、新しいビルになろうとしている。デル・マーだけでなく、サンディエゴ、いやカリフォルニア中のビーチタウンの不動産はクレイジーな状況だ。土地が高騰し、古くてクールなものを壊して開発が行われ、けれど彼らは壊そうとしていないもの、その価値をわかっているもの、その状況と戦っているのは年寄りたちで、若者は新しいものを欲しがっている。これはため息が出るばかりだ。同じことが世界中で起こっている。日本だってそうだろう。

早口で言葉を続けるジョエル。価値あるものを捨て去ってはいけない。もし完全に捨て去ってしまったら永遠に取り戻すことはできない。そんな焦燥感をジョエルの言葉から感じる。

内陸のユニバーシティ・シティで育ったジョエルは、23年前、19歳のときデル・マーで暮らすようになった。現在はふたりの息子の父親で、隣のソラナビーチに、スタジオ540という柔術を中心に

少し髪が白くなったのだろうか。41歳になったジョエルは、しかしエネルギーに満たされているように見えた。青白く透き通った彼の目は、狼のようにまっすぐに真実に向かい、その目に射られると、まるで魔法にかけられたように彼の世界に引き込まれてしまう。

まさか彼の存在を知らないサーファーはいないと思うが、ジョエル・チューダーはサーフィン界に大きな影響を及ぼしてきた人物である。1976年生まれ。5歳でサーフィンを始め、10歳の時、ショートボードを辞めロングボードにフォーカスした。つまり1986年。ロングボードになど誰も見向きもなかった時代である。ジョエルは、ドナルド・タカヤマやナット・ヤングをはじめ、今はレジェンドと総括される多くの年長者たちと行動をともにし、彼ら自身の口からヒストリーを聞き、サーフィンの根底を探ってきた。そして、彼らが行ってきたクラシック・ロングボードの進化を受け継ぎ、次なる次元に昇華させた。まだほんの10代の瘦せた少年がロングボードを自在に操り、優雅に波に乗ってみせる。ジョエルの存在こそがロングボード・ルネッサンスを生み、サーフィンに多様性を残した。前だけを向き、進化と発展だけを追及しよ

うとするサーフィン界にあって、後ろを振り振り返りながら、ショートボードディングが捨て去ってきた宝石を丁寧に拾い上げ、それを再解釈し、再定義して、自らの存在とともに提示してみせたのだ。

そして再びラインナップに戻ってきたロングボードディングは、およそ20年のタイムラグともに再び進化を始め、現在のオルタナティブ、フィッシュ、ミッドレンジスの普及につながっている。つまり、ジョエルがいなければ、現在のオルタナティブ・ムーブメントは存在しなかったかもしれない。

しかし、彼をロングボードというカテゴリーに押し込めてしまおうのはフェアではないだろう。世界中のトップショートボードがフォーカスし、しのぎを削るパイプラインをシングルフィンのシンプルなラインで見事に乗りこなす、フィッシュを駆って無駄のない美しいラインを描き、あるいはタバルアのような浅いリーフブレイクに美しくフィットしてみせる。ジョエル・チューダーは究極に完成されたサーファーである。

サンディエゴ郡デル・マーにあるマテユースのオフィスに現れたジョエルは、まず、自らが暮らす町の現状を憂いた。

「僕の両親はデル・マーの出身で、父親はチャノン(サーフボード・



ジョエルが描く無理のない美しいラインは、サーフィンの本質を語る

Photo/ MATUSE inc.

人生を本当にクールなものにしたいなら、 外に出て、イヤな経験もしながら、学ぶしかない。

した格闘技ジムを構えている。「僕は基本的にVANSのために動いていて、ダクトテープなどイベントの仕事をしたり、冬はノースシヨアで過ごすことが多い。40歳になってサーフィンを仕事と呼べることは幸運だと思う。」

一方で、サーフィン以外の何かをやる必要があることも感じていた。自分にとってはそれが柔術だった。そのために長年準備をし、今やアメリカでも最も大きい柔術ジムのひとつに成長した。競技だけを目的にするのではなく、ライフスタイルや健康維持のためのジムにしたかったんだ。

たとえばサーフィンを考えると、若いうちはサーフィン自体がエクササイズになる。けれど年をとると、サーフィンのためにエクササイズすることが必要になるんだ。人間の身体は永久に若く保たれるわけじゃない。その点、柔術は身体を強くするし、自分は長年続けて世界大会にも出場してきたから、サーファーのために柔術を提供できると考えたんだ。

サーフィンと柔術の他にもうひとつ、ジョエルがライフワークとして続けているのがヨガ。若い頃、ジェリー・ロベスと過ごす時間が長く、そこでヨガと出会った。初めてロベスのヨガを見たとき、その柔軟性に驚いたという。柔軟性

があれば怪我也防げるし、若さを保つことができる。

また、ジョエルはベジタリアンとしても知られている。野菜以外は魚を1ヶ月に2回食べる程度。ハワイで、地元で獲れた魚のポキを食べるくらいだという。

ベジタリアンになったきっかけは、オーストラリアのシェイン・ホラン、ロビー・ベイジとともに旅をしたこと。彼らの食生活がヘルシーであることに驚かされた。そして、長年ベジタリアンとしての生活を続けるウエイン・リンチと出会い、あるいはジョン・ペックと旅をして、肉を食べることをやめた。畜産のために森林伐採が行われるなど、肉食が地球環境に及ぼすインパクトを知ったのも理由のひとつだった。

やり始めた頃は何をやっているのかわからなかったが、次第に理解できるようになってきたという。肉体的にも、最初はひどく痩せたが、次第に体重が戻ってきた。20年前はベジタリアン・レストランも少なく、食べるものを探すのも大変だったが、今ではさほど難しいことではなくなった。それは日本を訪れても同じだ。

「僕はロングボーダーだから、30歳、40歳年上の人に囲まれて過ごすことが多かったんだけど、彼らはビールをたくさん飲み、良くないも

のを食べて、すごく太っていた。

それを見て食生活の大切さがわかった。サーフィンには、いい影響もあるけれど、悪い影響もある。パーティーはクールだけど、バイブラインはもっとクールだ。サーフィンのいい影響を受け、それによって健康を得られてラッキーだと感じているよ。」

そんな考えを実践できたのは、自身の中にコンベティティブな部分があるからだと感じている。単に競技に出場することだけではなく、勝利を望もうとする気持ちであり、誰よりも上手いサーファーでありたい、いい波に乗りたいという情熱が、正しい道に導いた。

そして現在も、ジョエルが人生において最も大切にしているのは、健康、そして家族である。

「といつても、トレーニングジムでフィットネスを保ちたいわけじゃない。それは違う。サーフィンをしたり、自転車に乗ったり、散歩をしたり(笑)、スポーツやアクティビティのための健康を保ちたいんだ。

日本の武道だってそうだろう。武術のために生活を築き上げる。食べるもの、着るもの、身のこなし、暮らしかつ、すべてがひとつの目的につながっている。そのことに価値があるという考え方は素晴らしい。

「僕もマネージメントではないし、コーチもマネージメントも付けたことがない。自分自身で考え、戦って、戦って、戦って、だからまだここにいます。戦いといっても、戦争のような戦いではなく、静かな、ときには自分自身との内面的な戦い。けれど、自分が自分であるために戦わなければいけない。人生をより良いものにするには競争心も必要だし、僕はそういうやり方が好きだ。」

「僕のゴールは永遠にサーフィンし続けること。ドリアン・パスコビッツのようにね。ドリアンは赤帯(黒帯の上の最高位)だよ」とジョエルは言う。

10代の頃からずっと、前を歩む人たちが学ぶ姿勢を貫いてきた。ロングボードを通して先人たちに触れ、その真実を自ら聞き、感じ、経験してきた。そのことがジョエル・チューダーという稀有なサーファーを生み出したのだ。

「たとえ燃え尽きたとしても、錆びることはない」。経験し、痛い思いをして自らを成長させること。いいも悪いもなく、真実を自分のものにしていくこと。そして、自らの人生を生き切る。クールなイメージをまとうジョエルの奥底には、サーフィンの、そして人生に対する熱いパッションが宿っている。

僕は、全てを自分の手で、自分のやり方でやってきた。これまで一度もエージェントに所属したこ